

東北帝国大学出立の頃 日本とドイツの交流を中心に

著者	木村 俊彦
雑誌名	論集
巻	45
ページ	1-15
発行年	2018-12-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/00130358

東北帝国大学法文学部出立の頃

—日本とドイツの交流を中心に—

木村俊彦

E・ヘリゲル 外国人教師

大正13年4月から昭和4年8月まで(1924-1929) 東北帝国大学法文学部の哲学および古典語の教官として、夫妻で仙台市に滞在したオイゲン・ヘリゲル (Eugen Herrigel, 1884-1955) は、釈宗活に参禅した大峽秀榮居士が友人の一人として Schüel Ohasama, "ZEN: Der lebendige Buddhismus in Japan" (Gotta 1925), xvi頁で、「私講師ヘリゲル博士」に謝辞を述べている。ヘリゲルはハイデルベルクでE・ラスクに学び、夭折した助教授の全集を早くに編集している。大峽については小稿「大峽秀榮独語訳『ZEN』と洞上五位偏正口訣」(『禪學研究』第91号)を参照されたい。ヘリゲルは仙台で "Urstoff und Urform" (1926) と "Metaphysische Form" (1929) を書いた(後述)。

東北帝国大学の招聘に応じたのは、大峽の感化に依る禅への好奇心からと彼は述べている。それは彼にとつては生きた神祕主義だった。大峽秀榮の上掲書に対するマールブルクのルドルフ・オットーの書いた "Geleitwort" (鷹引) は、小著『ルドルフ・オットーと禅』(大東出版社)の付録に収めた。オットーは私の調査で、1912年に建仁寺の竹田黙雷に相見したことも確実である。そこでの釈迦降誕会に随喜したことも推定できる。ハイデルベルクに二年間(大正10年8月から12年夏学期まで)学んだ大峽は、逆にヘリゲルに禅の興味を与えた。

新カント派ながら日本の禅の世界に関心を持ったヘリゲルには招聘を本場の禅に触れる良い機会とみた(『弓と禅』34頁)。

しかしオットーと違つてヘリゲルには遂に禅仏教との現象学的な出会いはなかった。因みに松島瑞巖寺の当時の住職は松原盤龍であり、大正15年には隣単の陽徳院に専門道場を開単している。ヘリゲルは最後まで禅を神秘主義だと誤解していた。オットーの言うヌミノーゼの実践神秘主義とは全く異なる。“Zen in der Bogenschüssen” (1948) には禅の話は全くない。

東北帝国大学法文学部は大正11年 (1922) の勅令によつて開学し、印度学仏教史講座の宇井伯壽教授・金倉圓照助教授が翌年に赴任している (哲学科でも同様) が、驚くべきことにヘリゲルは更にその翌年から哲学講座に赴任している。これには大正12年秋に帰国して北九州市の九州工業大学教授に復帰した大峽秀榮が文部省に紹介したのではないかと考えられる。哲学講座の教授達はヘリゲルを直接には知らなかった。

ヘリゲルは昭和4年 (1928) に帰国してエルランゲン大学教授になり、哲学の授業で「禅」の話を吹聴したという。その遺稿は“Der Zen-Weg” (München 1958) であるが、これも禅の内容は鈴木大拙の英語論文からの想像である。小本は2002年のもので15版を数えている。更に禅については何も述べていない“Zen in der Kunst des Bogenschüssens” (1948) の稲富・上田訳『弓と禅』、福村出版の小本は改訂10版である。この英訳は35版を数えているという。アップル社を創設したステイヴ・ジョブスの枕頭の書という伝説もある。

大正15年 (1926) の宮城県の禅界は、松島・瑞巖寺の住職・松原盤龍が、隣単 (東隣) の陽徳院に専門道場を開単したことで本格的となる。しかしヘリゲルが松島に行つた記録はない。盤龍老師 (1849-1935) は岐阜県に生まれ、瑞龍寺の薩門、次いで京都五山の相国寺の荻野独園に就いて印可された。姫路市の別格寺院から明治38年に松島に転住した。西田幾多郎も昭和8年 (1933) に連続講義で来仙したが、教授達は松島遊覧に連れ出しただけのおよびである。

ヘリゲルの『弓と禅』は1948年の改作で、5年後に更に改訂され、1981年に教え子の稲富榮次郎・上田武両氏に和訳された。その前作は日独文化協会の講演で、1936年に日本の雑誌に掲載され、柴田治三郎氏が和訳した (岩波書店収録、昭和15年)。弓と禅の強引な結び付けは独訳のある鈴木大拙『禅と日本文化』(Zen Buddhism and its Influence on Japanese Culture, 1938) における「禅と剣道」からヒントを得たらしい。法文学部の小町谷教授が、禅仏教はドイツ人には理解も、ましてや実修も無理

だとして、ドイツ人の喜びそうな伝統的武道をサークル活動に勧めたに過ぎない。グステイ夫人は生花だった(和訳があるというが、原書とも筆者未見)。

当時の哲学科の授業課目が昭和三年度の『哲學雜誌』に掲載されていた(京大図書館)。それに依ると「ヘリゲル教師」とある。これは「外国人教師」という、東北大学特有の職名で、すべての事典類は「教授」か「講師」にして曲解しているし、京大本部図書館にある哲学事典類四種のうち二種が「ヘリゲル」の項目無しである。所で教官ノルマは当時から講義・講読・演習の三科目で、語学教育は掲載されていないから、金倉助教授のサンスクリット語も(あった筈だが)、専門科目でなかったため記述がない。徳永茅生女史の回想に、梵語・バリ語を学んだとあるのがそれであろう(自伝³³頁)。正確には、「大正14年4月―昭和3年3月、仏教、梵語、バリ語、支那学、西洋哲学等を学習」とある。金倉助教授は大正15年4月に帰国して、女史の学習した「梵語・バリ語」を担当された。

石原謙、高橋里美、小山鞆枝三教授に並んでヘリゲル教師の題目は、「哲学講義, Kants transzendente Philosophie」と「哲学講読, Kant, Grundlegung zur Metaphysik der Sitten」で、「独文学」も一科目あるが、稲富榮次郎氏の伝えるヘリゲル教師の「ギリシヤ語初級・中級」は書いていない。折角の機会だから講義内容を伝えると、「鈴木教授、普講・大乘仏教、特講・世親唯識、演習・成唯識論、寺崎助教授・奈良仏教史、出村講師・基督教史」、「宇井教授、普講・印度哲学史、特講・印度論理学史、講読・因明入正理論、金倉助教授、演習・Sankhyatavakannudi」である。後者の科目が少ないのはサンスクリット語初級・上級とパーリ語があったからだと思う。

E・リゲル教師の業績は次の二著で、東北大学図書館にある。

Eugen HERIGEL, Urstoff und Urform: Ein Beitrag zur philosophischen Strukturlehre.

Verlag von J.C.B.Mohr, Tübingen 1926.

Idem, Die metaphysische Form: Eine Auseinandersetzung mit Kant.

Verlag von J.C.B.Mohr, Tübingen 1929.

前者は Hoffmann-Rickert の監修するハイデルベルク哲学史叢書 8 にあたるので、それがハイデルベルク大学に提出した Dissertation であろう。しかしエルランゲン大学教授に赴任した。いずれにしても東北帝大は本場の新カント派（但し二論文とも、カントの感性論の曖昧さを批判した対象論）の学者を招聘することに成功し、それはルドルフ・オットー及び大峽秀榮居士の縁であった。ヘリゲル教師は最後まで、禪（禪仏教ではない）を生きた神秘主義の思想と思っていた。

大峽秀榮居士の推薦

大峽秀榮は "ZEN: Der lebendige Buddhismus in Japan" の "Vorwort" に書く。"Mein Freund Herr Dr. Eugen HERRIGEL hat die fertig-gestellten Übersetzungen bereitwillig durchgesehen und eingehend mit mir besprochen." (S.xvi) 「我が友オイゲン・ヘリゲル博士は完成した翻訳を進んで通読し、私と徹底的に議論した。」これがヘリゲル来仙の縁になった。大峽は二年半のドイツ留学を終えて、英米見学の後、大正12年(1923)年に帰国して九州工業大学に復帰した。上記出版は帰国後の1925年に、やはり哲学仲間の August FAUST にゆかりの Leopold Klotz Verlag, Gotha から出版された。半世紀近くを経て Darmstadt の書籍組合が再刊したという。私は京都大学文学部書庫のものをコピーさせて頂き、ROTTLOFF の「薦引」(Geleitwort) を「ルドルフ・オットーと禪」(大東出版社, 2011年) にそのまま影印させて貰った。目次も念の為に、複製している。

この書が出色である所以は、臨済宗史と所依の詩偈および公案の話頭40数則をドイツ語訳していることである。その大要は『禪學研究』第91号(2013年)に「大峽秀榮独語訳『ZEN』と洞上五位偏正口訣」の中で紹介した。ここで問題なのは、ヘリゲルが訳稿を見ているのに、臨済禪を全く理解せず、その思想を神秘主義として捉えたことである。ルドルフ・オットーは前掲書で述べたように建仁寺で竹田黙雷に相見して、その「理念」(Idee)を聞いたことで、「実践的神秘主義」として、自らのヌミノーズ理論に組み込んだ。四月八日の釈迦降誕会にも随喜した筈である。高野山や比叡山にも登って仏教との現象学的出会いを経験したが、東京では大学関係者や官僚・政治家との懇親会ばかりで落胆したとある(妹宛書簡)。

'Über Zazen als Extrem des numinösen Irrationalen' ('Aufsätze das Numinose betreffend' (Gotha 1923)とその報告をしたばか

りのオットー博士が、ここでは長文の「薦引」を大峽の為に寄せたのである。そのスミノーゼ宗教理論は禪理解にも適していた。ヘリゲルはカントに叱られる所の神秘主義に走るだけであった。哲学論文には『カントとの討論』という副題がある。当時も今も宮城県の観光といえば松島瑞巖寺の笹だが、四年半の仙台滞在の間にヘリゲルが訪れたかどうかはつきりしない。Der Zen-Weg (O.W.Barth Verlag, München, 15 Auflage 2002) では多少禪を知らうとこしているが、D.T.Suzukiのものを読めばZenが判るといふ西洋人の性癖がよく出てゐる。Zenの指導者がまわりに居ないのである。カリフォルニアのJōshū SASAKI(佐々木承周、三浦承天の法嗣)、その法嗣であるウィーン人のGenō KOUDELA 両老師も没した。前者はロサンゼルスから二時間かかる山にMount Baldy Zen Centerを営んでいたし、後者はウィーン市内でBodhidharma Zentōを引率していた。これらの師家と違って在家の大拙居士鈴木貞太郎自体、誰にどの程度参禅したかは不明の人物である。ヘリゲルやファウストは大峽秀榮のドイツ語訳の禪テキストを読んだ筈だが、彼らが禪を理解できなかったのは当然である。

女子学生・徳永(宗) 茅生女史

ヘリゲル教師と同時期に宗教学専攻生だった徳永茅生さんは、自伝『袖ふりあうもドイツ留学の想い出』(昭和45年)によれば、金倉圓照博士と同年の1898年生まれである。熊本県から兄弟と一緒に京都市に移り、市立第二高等女学校(現・朱雀高校)を卒業後、大阪府立女子師範学校(現・大阪教育大学)を卒業して、女子入学が可能だった東北帝国大学法文学部を受験して入学したのが大正14年、実質的な開学の翌年であった。大正11年(1922)に勅令がおりた翌年から学部が開設された(『東北大学百年史四』部局史一参照)。その翌年開講の宗教学を専攻された宗茅生女史は、自伝の年譜によれば、京都府立第二高等女学校と大阪府立女子師範学校を卒業後、大正14年(1925)に東北帝大法文学部に入学した。永田英明氏はこのケースを「東北帝国大学における女子学生・女性研究者」(『東北大学史料館紀要』第9号、2012)の7頁の表に載せていない。女史は昭和三年(1928)に卒業して12月にサンスクリット文学の研究を志ざして、フライブルクのフロイマン教授に就学する。かくて偶然、ヘリゲルの在仙期間と完全に重なる。二年半後に帰国して朱雀高校と東京の跡見女学校に勤務し、昭和

九年には仏教大学（現在の大正大学）叢書から『吠陀文學』及び『印度の説話文學』を出版した。昭和12年に東京の宗正路氏と結婚して現姓となる。昭和32年に『文化』第21巻5号（鈴木宗忠教授古稀記念宗教学特輯）に「パンチャタントラ譯後雜考」を載せたのは女史の還暦直前のことである。この後、終世の目標であった『五章の物語（ばんちやんとら）』（昭和40年）とカーリダーサの『ラグヴァンシヤ』（昭和51年）を平凡社から出版された。没年は判らないが、金倉博士と同年であるから、昭和62年没の金倉博士（90歳）と近いのであろう。

徳永茅生女史の卒業論文は、カントの『宗教論』を扱ったものである（女史）。私は Immanuel KANT, Die Religion innerhalb der Grenzen der blossen Vernunft, Friedrich Ricolomius, Königsberg 1794を当時の古書で入手しているが、カント生前の再版本である。また徳永茅生女史の訳業のふたつ『吠陀文學』と『印度の説話文學』は合わせて300頁近い。筆者所有の両古書には、昭和十年代の購買者が感激してサインしている。最後に取り組まれた宮廷詩人カーリダーサについては、木村俊彦訳『マクドネル・サンスクリット文學史』に論じられており、『パンチャタントラ』も同様である。

「在学中は仏教の研究を相当進めた」とあり、共通科目である金倉助教教授の『梵語の学習』は「ドイツ語の習得」と共に「憂き身をやつした」筈である。この時期の女子学生は哲学専攻に大正15年卒業の桜田フサ氏と心理学専攻の黒瀬（久保）艶子氏、昭和2年卒業に英文学専攻の大原恭子氏、昭和3年卒業に哲学専攻の中島（川上）貞子氏がいる。あわせて上級生に5名を数えた。女史は心強かつたであらう。

尚、女史は自伝書の「あとがき」で、「禅語」として次の七言絶句を引用している。訓読すると、「尽日春を尋ねて春を見ず。芒鞋踏遍す、臘頭の雲。帰り来りて偶たま梅花の下を過るに、春は枝頭に在り、已に十分」であり、「昭和四十五年十一月、著者」とある。これは昭和三十四年の茶道雑誌『淡交』の福嶋俊翁記事から引いたものであり、宋の載益の「探春」であるが、特に禅語というわけではない。

戦後、金倉博士の門下から中村了昭氏が出て、『マハーバーラタの哲学—解脱法品原典解明—』上・下を和訳され、続けて『新訳ラーマーヤナ』全七巻を翻訳刊行された。いずれも膨大な原典訳で、宗茅生女史に続く快拳である。山折哲雄氏は

雑誌論文に「叙事詩にみえる葬送儀礼 (Pretakya)」や「シャクンタラー劇管見」などを発表されている。また後藤敏文門下生が輩出してヴェーダ学やサンスクリット学の業績を挙げていることは本学会に周知の通りである。

ルドルフ・オットーの禪論

大峽秀榮居士は米沢出身で第二高等学校から東京大学の哲学科を明治40年(1907)に卒業して、大正10年、後の九州工業大学教授に赴任してすぐ、哲学等の研究のためドイツに渡る。この経験を活かして1925年に Rudolf Otto, "ZEN: Der lebendige Buddhismus in Japan" を Gotha から出版した。二年前にヌミノーゼ論を出したマールブルグのオットーの薦引 (Geleitwort) 付きである。その初めの概略は次の様にある。

「我々には全く異色の世界である禪は、仏教の瞑想 (Jhāna) の宗派からきている。その日本名が「禪」である。それはインドから中国に行脚してきた菩提達磨 (Bodhidharma) が伝えたもので、日本に伝播して一大雄派になった。本書で大峽が翻訳した禪テキストとその解説は、禪の世界からの自己証言である。ここに述べられているのは、長い禪的体験と西洋文化の学習を通して吐露した思索である。私は既に小論『ヌミノーゼに関する論文集』(Aufsätze das Numinose betreffend, Gotha 1925) で、禪の精神的傾向を指摘した。ここでは西洋神祕主義のパラドックス、純粹経験主義、反対の一致 (coincidentia oppositorum) などと禪とのパラレリズムを示した。本書はそれを興味深く再現している。」

オットーが京都の建仁寺で竹田黙雷と相見して、禪は言語道断・意路不到底であり、煩惱即菩提 (Samsāra selber ist jizai Nirvāna)、『自己の中に仏心 (Buddhaherz) を見ることであると聞いたことを記している。小著『ルドルフ・オットーと禪』を参照されたい。Ohasama, "ZEN" の内容は、前文でオットー、リッケルト、出版者の Al. Faust のほかシンチンガー、ヘリゲル、ヤスパース、ヴォッバーミンらに謝辞を呈している。序論 (Einleitung) で、禪宗史と公案の体系を概訳し、公案の話則を四十則ドイツ語訳しているが、ドイツ側の学者は殆ど読んでいないし、理解していない。内容は、序論で、印度と中国の禪宗史を述べ、次に宗派と禪師の語録のシエマを表示し、信心銘、証道歌、白隠和讃を訳した後、『無門関』と『碧岩録』から

四十則あまりを訳して註記を付けたものである。大峽はマールブルク大学宗教学資料館に師の釈宗活の墨跡を置き、竹田益州は自分の雲水資具を寄贈しているが、これはオットーが竹田黙雷に相見した証跡である。

ロンドン大学の東洋学研究所 (SOAS) にある日本宗教研究センターの会報 617号に、マールブルク大学宗教学資料館の Kajia TRIPLETT 常勤講師が 'R. Otto and ZEN' と題する紹介を出した。そのカラー図版がオットーの1930年の肖像画と大峽の 'ZEN' のカラー表紙、及び私が寄贈した竹田黙雷筆の「寂照」の額である。

大峽宗榮の "ZEN"

大峽宗榮 (おおはざましゅうえい) は1925年、禅仏教紹介の解説書を、1925年に Gotha から出版した。S. Ohasama, "ZEN: Der lebendige Buddhismus in Japan", Leopold Klotz Verlag である。その序文にあたる 'Geleitwort' (薦引) をマールブルクのドルフ・オットー (Rudolf Otto) が書いている。米沢出身の大峽は東京大学哲学科在学中に釈宗活の両忘禅協会にて参禅した如くで、マールブルク宗教学資料館に宗活の書が寄贈されている。私が贈った竹田黙雷の「寂照」の板額は、Kajia Triplett 女史がロンドン大学東洋学部日本宗教ニュースレターに写真掲載した (Research Notes 欄)。本文は大峽の "ZEN" を紹介したものであり、そのユニークな意匠の表紙をまず掲載したのは言うまでもない。因みに女史は文通では日本語を使われる。

大峽の該書は仏陀の理想から始まって、禅宗が中国において五家七宗に展開する通史を序論 (Einführung) で述べている。それだけでも欧米では学問的な禅論であるが、本論では公案禅が展開したことで30あまりの公案をドイツ語訳しているのがある。鈴木大拙のエッセー風、伝灯録の禅師エピソード丸写しの禅論に較べて、欧米人への正確な入門書になっている。前半は懺悔文、四弘誓願、白隠和讃、三信心銘、永嘉証道歌をまずドイツ語訳し、後半で無門関と碧岩録の公案をドイツ語訳するという空前絶後の業績になっている。独訳だけでなく、註記で解説を加えているが、序論の後の本文は、'Übersetzungen' としている。序論が解説で、本論はその資料ということである。

因みにその公案を数えると、1無門関第一則「趙州狗子」、2無門関第二十三則「不思議」から始まり、1.は無字、2.は本来の面目に通ずる基本的な公案であり、四十則余りをドイツ語訳している。参禅弁道の実践を前提にした解説であり、この点も鈴木木の神秘主義禅と対照的である。同期の西田は「鈴木君は専ら圓覚寺で坐りおり」と手紙に書き、自分は明治30年と32年に妙心寺退蔵院に下宿しながら隣の天授僧堂の虎関老師に通参した。大峽は釈宗演の弟子・釈宗活に参禅した。ハイデルベルクの私講師E・ヘリゲルにも最後に謝意を呈している。後者が仙台の新設法文学部に赴任したのは、留学について何かと文部省と交渉のあった大峽の推薦だったであろうと、本稿で推測した所である。1925年にZENを出版した大峽は、当時43歳で九州工業大学を退職して東京に出ている。1924年に開講後二年目に仙台に赴任したヘリゲルは、1923年に帰国した大峽の推薦が文部省が設立委員にあったとみられる。

R・オットーのヌミノーゼ的禅論

ルドルフ・オットー(1869-1937)は、大峽がハイデルベルクに滞在していた頃(1921-1923)は50歳代の時、*West-östliche Mystik*の出版が1926年、*Aufsätze das Numinose betreffend*が1923年、日本に来たのが1912年のことである。後者の書はその時の京都建仁寺での竹田黙雷との相見が報告されている。Über Zazen als Extern des Numinosen Irrationalenである。この来日はゲッチェンゲン大学の私講師の時であり、1923年にそれまでの雑誌論文をこの書に纏めたものである。因みに1917年にプレスラウからマールブルクに移った年に*Das Heilige*を出版している。

この論文の初めに、「ヌミノーゼ的不合理性はすべての宗教のモメントである」と述べ、パラドクスやアンチノミーや反対の一致をその内容として挙げています。特に京都(Tokyo)はKyotoの誤記)の建仁寺での竹田黙雷との相見(しょうけん)でその観を深めた。上記論文の禅の記述を挙げて(SS.121,21-122,7)、翻訳しておく。

“Wer nicht arbeitet, der soll auch nicht essen”, war das Motto des Hyakujō. Aber das alles ist noch nicht ihr Wesenszug. Ich tat einen ehrwürdigen alten Abt in einem feinen stillen Kloster in Tokyo (Kyoto) die Frage, was die Grundidee des Zen sei. Da er

so in diese Fragestellung eingezwängt war, musste er wohl mit einer 'Idee' antworten. Er sagte: 'Wir glauben, dass Sansāra und Nirvāna ist nicht verschieden, sondern dasselbe sind.' Und dass ein jeder das Buddhaherz finden soll im eigenen Herzen'.

Aber in Wahrheit ist auch dieses nicht die Hauptsache, denn auch das ist noch 'gesagt', noch 'Lehre', noch übermittelte Die Hauptsache an Zen ist aber nicht eine Grundidee sondern eine Erfahrung, die sich nicht nur dem Begriff sondern sogar der Idee selber entzieht. Zen offenbart sein Wesen in folgenden Momenten, die seine Künstler ohne Wort in Miene, Gebärde, Haltung, Gesichts- und Leibes- Ausdruck ihrer Meister ganz unvergleichlich eindringlich vor Augen gestellt haben."

「働かざる者、食うべからず」は百丈のモットーである。しかしそのすべてはまだ禅の本質ではない。私は素敵に静かなる僧堂で、高德の老師に請問した。禅の基本理念は何か、と。そこで彼はこの質問に直面して、〈理念〉なるものを答へざるを得なかった。彼は言う。我々は、輪廻と涅槃は別々のものではなく、同一であると見ている。そして各自の仏性を心の中に見なければならぬ、と。

しかし実際、これだけが主題というわけではない。それはまだ言語道断底のものであり、教外別伝底のものである。しかし禅の主題は概念に無いだけではなく、理念自体を取り去ることである。禅はその本質を下記の要因に現われている。禅の芸術家は老師の言外の様子、動作や身のこなし、外觀、全く比類なき表情や身振りを眼前のありのままに写しとろうとするのである。「これは建仁寺で見た達磨の絵を念頭に置いている。註記には日本で遇った人と絵を参考にしたと書いている。

禅に対するオットーの相当の理解で、自らのヌミノゼ宗教論の確認を開示するものとなっている。黙雷の「理念」は彼の説教集の『黙雷禪話』（中外日報社、昭和十年）の「仏魔一枚」、「三世諸仏と一体無二」、「覚夢不二」に表わされている。これらは西洋的には二律背反 (Antinomie) と云ふことになる。この後オットーは 1. 2. 3. 4. 5. の五段にわけて詳論する。「絶対矛盾の自己同一」(coincidentia oppositorum) は、行為 (Tun) であり、今や輪廻は涅槃である。「放下著」(Selbstlosigkeit) であり、実践的神秘主義と呼ぶ。禅は自性の徹見 (Selbst-finden-wollen) であり、そこには恩寵 (Grade) はないが、慈悲 (Dienst-willigkeit) はある。しかしこの五段は鈴木大拙の論文に借りているということ、例えば私に宗教学

資料館の司書が下さった『The Eastern Buddhist', Vol.2, Pts. 3-4, 1922⁴⁵、The Ten Cow-Herding Pictures』の「十牛図」を訳している。しかし、オットーは大峽宗榮の『ZEN』には何も学んでいないのは残念である。

オットーのエッセーに固有名詞は出てこないが、法嗣の竹田益洲が、黙雷示寂の「昭和五年（1930）雪安居」と記した見台を、マールブルクに黙雷の遺品として贈っているのが、それと判明した次第である。益洲自身の雲水用具も添えてあった。講本を置く見台に上記の記銘があり、私の出版した『ルドルフ・オットーと禅』（大東出版社）に口絵掲載している。オットーの「薦引」を、この本で影印複製させて頂いたので、こちらは原文で味読されたい。1925年のGothaでの出版は、1970年に書籍協会が再版したそうである。

オットーは言う。

まだ異色の仏教世界から出た禅宗はインド人教師ボーダイグルマが中国に伝えた瞑想（*dhyaana*）の宗教であるが、我々には理解し難いこの禅を、日本の禅の伝統に生きて且つ西洋の学問を十分に身につけた大峽秀榮が禅テキストを解説したのである。私は『ヌミノーゼに関する論文集』で、既に禅の精神的方向を示している。それは全くのパラドックス、純粹経験主義、反対の神秘的同一視、即ち輪廻（*samsāra*）と涅槃（*nirvāna*）の同一視、概念の超越の傾向などで、それらがここに興味深く現れて自己証言している。」と述べている。オットーはヌミノーゼ的宗教論ゆえに禅の素描ができ、京都での現象学的出会いによって初めて禅に肉薄できたのである。

京都とか建仁寺とか竹田黙雷とかの固有名詞は出てこないが、元来、ドイツ人同様この都市や文化に疎かったのであるから、仕方がない。クラーツ館長のように「来訪者名簿」を要求するのはドイツ人らしく理屈っぽいだが、黙雷自身は外国の学者が相見したことも忘れていようであろう。圓覚寺の参禅名簿は元良勇次郎に並ぶ夏目金之助が有名で、何度も写真掲載されて幸福なことである。「東の宗演、西の黙雷」と言われた両老師の個性の違いである。

オットーの『Über Zazen als Extrem des numinosen Irrationalen』（「禅におけるヌミノーゼ的に非合理的なものの極致」）は、27論文を収めた『Aufsätze das Numinose betreffend』, Stuttgart / Gotha, 1923⁴⁶、『Das Heilige』, München 1917⁴⁷の補遺として出版

された。後者の副題が既に“Über das Irrationale in der Idee des Göttlichen und sein Verhältnis zum Rationalen”である。華園總鷹訳「聖なるもの」の付録に、「仏教におけるヌミノ―ゼなもの」と改題して全訳されている。但し“Zen”を「坐禪」と解釈されていることは前田毅氏と同じい。これは竹田黙雷の癖をつかまないと理解できないう「禪」の語義であり、オットーに坐禪まで期待するのは無理である。

オットーは禪との現象学的出会いの記述の後に、五段にわけて鈴木大拙の英文禪論（“The Eastern Buddhist”所載）を取り入れた禪論を述べている。ゆえに五段は我々には意味がないが、華園訳「聖なるもの」の付録に全文を和訳して収められている。しかるに本稿はこの正文、特に先の引用部分を核心の資料としている。後に出る西田幾多郎の禪論は、より思想的に無を対象としたものであるが、彼は現象学的にも禪と出会っている。道津雪門への参禪から始まって、妙心寺天授僧堂で短期間、居士禪を学んだ。そして哲学者として絶対無即場所というシエマに固執した。矢島洋吉先生の言われるように、絶対無を言い乍ら絶対有を求めたものである。そういった先生の小生への書翰は『ルドルフ・オットーと禪』の39頁に載せたから、その資料はそちらに譲る。

東北帝国大学法文学部出立の頃のプロットの略年譜

明治25年（1892）圓覚寺の今北洪川死し、釈宗演が後継者となる。

明治27年（1894）夏目金之助、夏に松島に来遊 瑞巖寺の中原鄧宗に参禪せんとして断念、暮に圓覚寺の釈宗演に参禪「門」に体験記がある。その書翰は文庫本全集のみに明治27年の項に収められている。

明治33年（1900）釈宗活、釈宗演の法嗣になり、両忘禪協会師家になる

明治38年（1905）松原盤龍、瑞巖寺に赴任

明治40年（1907）大峽宗榮、宗活下で東大哲学科を卒業

大正元年（1912）ルドルフ・オットーが建仁寺で竹田黙雷に相見

- 大正2年 (1913) 北條時敬、東北帝大二代目総長として赴任
 大正10 - 12年 (1921-1923) 大峽宗榮がハイデルベルクに留学
 大正12年 (1923) 東北帝大法文学部立
 1923 Rudolf Otto, "Aufsätze das Numinose betreffend", Gotha 出版
 大正13年 (1924) ハイデルベルクの私講師 Eugen Herrigel 法文学部に赴任
 大正14年 (1925) 徳永茅生、法文学部に入学
 この年 大峽ZEN: Der lebendige Buddhismus in Japan", Gotha 出版
 大正15年 (1925) 金倉圓照婦任 女史がそのサンスクリット・パーリ語を受講
 昭和3年 (1928) 徳永茅生は卒業してフライブルクに留学
 昭和4年 (1929) ヘリゲルはエルランゲンに赴任

〈主要資料〉(年号は出版物に従う)

- Schüefel Ohasama, "ZEN: Der lebendige Buddhismus in Japan", L. v. Klotz Verlag, Gotha, 1925.
 木村俊彦「大峽秀榮独語訳『ZEN』と洞上五位偏正口訣」『禪學研究』第91号、平成25年。
 同「ルドルフ・オットーと禪」大東出版社、2011年。Geleitwort von Rudolf OTTO zum "ZEN" は本書の付録に複製したので、参照されたい。
 重要な資料である。
 『東北大学百年史』四、部局史一、東北大学出版会、平成15年、第一章「法文学部の創設」。
 オイゲン・ヘリゲル「弓と禪」、稲富・上田訳、福村出版、1990年。
 『哲學雜誌』、第43巻第496号、哲學會、昭和3年。
 Eugen Herrigel, Urstoff und Urform: Ein Beitrag zur philosophischen Strukturlehre, Mohr, Tübingen, 1926; Id. Die metaphysische Form: Eine Auseinandersetzung mit Kant, Tübingen, 1929.
 堀野宗俊「現代瑞巖寺の一世紀を回顧して」『瑞巖寺宝物館』平成16年。

宗茅生「袖ふりあうもドイツ留学の想い出―」、東京、昭和45年。

同訳「五章の物語（パンチャタントラ）」、平凡社、昭和40年。

同訳「カーリダーサ著ラグヴァンシヤ」、平凡社、昭和51年。

徳永茅生「吠陀文学」、同「印度の説話文学」、佛教学鑑社、昭和9年。

なお「東北大学文学部同窓会々員名簿」平成21年版153頁の「チノ」の名は誤記。

Rudolf Otto, 'Über Zazen als Extrem des numinosen Irrationalen', 'Aufsätze das Numinose betreffend', L. Klotz Verlag, Gotha, 1923. なお「坐

禅」は「禅」の意味で、オットーが相見した竹田黙雷の口癖である。実際に現象学的な出会いがあった証跡である。

【文化】鈴木宗忠教授古稀記念宗教学特輯、1958、宗茅生「パンチャタントラ譯後雑考」。

* マールブルグ大学図書館の Otto-Archiv 中のオットー書簡については、M. Kraatz 館長と令嬢司書のお世話でロビーを頂いた。

The Beginning Literal Faculty of Tôhoku University: An International Fact between Japan and Germany

Toshihiko KIMURA

東北帝国
大学法文
学部出立
の頃

Foreign Teacher Eugen Herrigel (1894-1955) of Tôhoku Imperial University stayed in Sendai 1924-1929 as a teacher of philosophy. He was famous to publish the “Zen in der Kunst des Bogenschiessens”, 1948. But he never studied Zen under Zen Abbot. His interest to Zen was caused by Schûej Ôhasama who had composed the “ZEN: Der lebendige Buddhismus in Japan”, 1925. They discussed on Zen in Heidelberg. In his ‘Vorwort’ Ôhasama related that he had discussed on Zen to Herrigel, and translated a history of Zen Buddhism and problems of Zen in his “ZEN”. But Herrigel learnt nothing on Zen in life.

Rudolf Otto wrote a commendation to Ôhasama’s “ZEN”. Otto had been once taught by Zen Abbot Mokurai Takeda in Kenninji temple, Kyôto 1912. There he was astonished at the parallelism between Western mysticism and Zen tenets, for instance, contradiction, apposite coincidence, pure intuition and so on. In the Religionskundliche Sammlung in Marburg there is a relic of Mokurai Takeda sent from Ekidjû Takeda, Successor of Mokurai Takeda. This fact offers an evidence of Otto’s meeting with Abbot Mokurai at Kenninji temple. But Herrigel never learnt Zen Buddhism in Sendai, even if Abbot Banryû Matsubara opened a Zen training center at Zuiganji temple 1926.

On the contrary Miss Chifu Tokunaga went to Freiburg under E.Leumann to learn Sanskrit studies more after learning religious and Sanskrit studies at the beginning literal faculty of Tôhoku University 1928. She translated the Pañcatantra and the Raghuvansha into Japanese later by her name, Sô Chihu.